

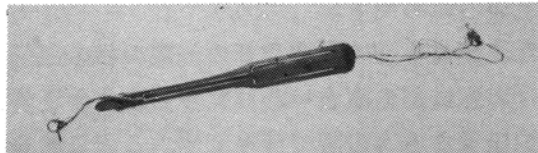
【フィールドからデスクから】

ムックリの音

口琴^{こうきん}というのは、杵^{はき}に挟まれた弾力のある薄い材を、片方を固定し片方を弾いたり紐^{はじ}で引いたりして振動させて音を出し、さらにそれを口の中に共鳴させていろいろに音色を変えて楽しむ楽器のことで、世界の多くの民族が持っているものです。

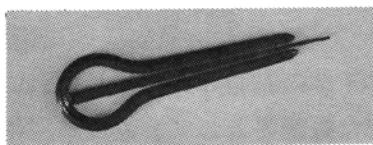
アイヌの口琴は、ムックリ、ムックル、ムック、ムックナ、ムックン、などとさまざまに呼ばれています（ここでは以下「ムックリ」と呼ぶことにします）。現在広く用いられているのは竹製ですが〔写真1〕、ネマガリダケ（チシマザサ）やサビタ（ノリウツギ）やその他の素材が使われることもあったようです。

〔写真1〕



また、樺太（サハリン）のアイヌには竹製の口琴の他、金属製の口琴も伝わっています〔写真2〕。竹製のものとは構造や奏法が違います。

〔写真2〕



（杵の先端は少し反っている）

* * *

口琴の魅力にとりつかれる人は少なくありません。

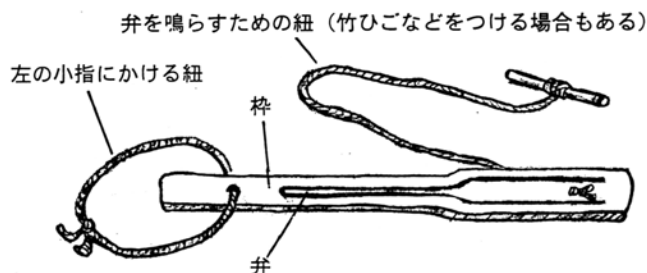
口琴をどんな時にどう使うかはそれぞれの民族や地域によりさまざまですが、広い意味での楽器としての口琴には、いくつか共通する面白さがあります。

そのひとつに、音を自分の身体（主に口の中）にじかに共鳴させつつ、その音色や音量をいろいろに調節^{かな}し奏でていくという、まさに音を体感する心地

よさや楽しさを味わえることがあります。他の人の演奏を外側から聴くときと、自分自身が音の共鳴体となっているときとでは、同じ音でも感じ方・聞こえ方が違います。いわば、音が身体に「直接」響く感覚を演奏と同時に味わえるという、この楽器独特の魅力と言えるでしょう。

口琴の演奏では、弁^{べん}（振動させる部分）の振動音を口の中に共鳴させ、振動する弁に息を吹きかけたり吸ったり、口の中で舌を上げたり下げたり、それらをすばやく何度もおこなうなどして、音の共鳴や増幅のしかたを複雑に変化させます。また、弁の振動自体を手元で強くしたり弱くしたりすることによっても、音色や音量に変化をつけています。さらに、弁の振動音と同時に発生しているいろいろな音の成分を、口の中の大きさを変えることによって、それらの成分のどれかが瞬間的に強調されるように調節もしています。

このようにして作られる音色の変化は、口琴の音楽を構成していく上で、たいへん重要な要素となっています。



〈竹製のムックリの構造〉

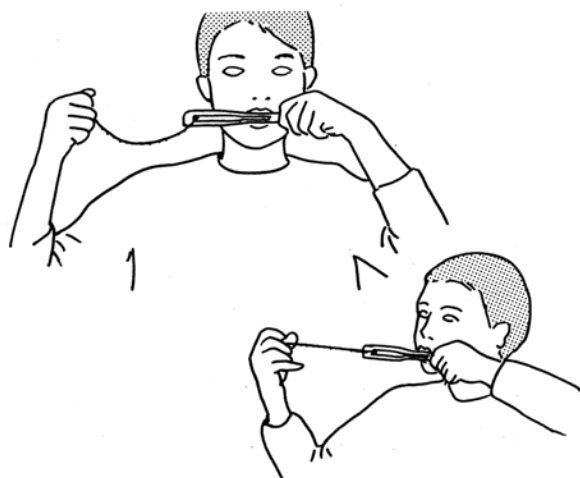
* * *

アイヌのムックリや周辺の民族の伝統的な口琴の音楽は、必ずしも、音程の決まった音（例えばドレミファ…といったような）を組み合わせでメロディーを作る、というものではありません。弾かれた弁の音が響くときの音色の移り変わり自体が、いわばメロディーとして、曲の展開や構成を左右する大事な要素となっています。

もちろんそれは、音程の要素を無視しているということではありません。響かせ方によっては一定の高さの音がメロディーを作っていることもあります。が、それよりは、さまざまな音色を作り出し、それらを組み合わせて全体の響きを作っていくことが、伝統的なムックリの音楽では重要であるということです。

* * *

さて、竹製のムックリの場合、弁の根元あたりに付けた紐^{ひも}を引いて振動させるという弾き方^ひをします。初めての人^{ひと}は、まず口から離しておいて弁を鳴らす練習を勧められることが多いようです。このときブーン…と余韻^{よゐん}のある響きを出すには、人によってはコツがつかみにくいと感じるかもしれませんが、機会があったらぜひ挑戦してみてください。身体に音が直接共鳴するのを感じ、音色をさまざまに工夫する面白さを味わうところから、ムックリの音の楽しみはさらに広がっていくことと思います。



〈竹製のムックリを演奏する時の構え方〉

- ・竹の表面側を自分の方へ向けます
- ・左の親指と人差し指で杵の端をしっかりと固定して頬に当てています
- ・右手は軽やかに手首のスナップをきかせ放り投げるような感じで勢いよく引きまします
- ・杵は、啜^くえるのではなく唇にそっと当てる感じにします

〔写真1：財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構（写真提供）、芽室町教育委員会蔵〕

〔写真2：アイヌ民族博物館（写真提供）、「児玉コレクション」より〕

甲地利恵（研究課・研究職員）

【問い合わせあれこれ】（5）

＜質問＞アイヌの衣服の文様の名前や意味を教えてください。

アイヌの衣服に施した独特の文様は、布を切ったり、刺しゅうをしたりして作ります。その美しさから、木彫りの文様と並んで解説を求められることの多いものです。

当センターに寄せられる問い合わせには、衣服の文様の種類や意味、その起源についてより詳しく知りたいというものが多くあります。

* * *

当センターでは、アイヌ文化小冊子『ボン カン ピソシ 2 イミ（着る）』（1997年）で衣服についてとりあげており、そこでは文様の種類や名前については細かく例示していません。というのは、衣服の文様の種類や名称については、話をきかせてくれるお年寄りや、研究者によって様々な説明や解釈がなされているためです。

また、刺しゅうの文様やその一部の棘^{とげ}の部分には魔除けの意味があるといわれたりしますが、実際は地域や伝承する人の間で様々です。このことをふまえ、「昔のことをよく知っているお年寄りの話でも、文様の棘^{とげ}の部分には魔除けの意味があるという人もいますし、文様には特にそのような意味はないという人もいます」と書いています。

なお、アイヌの衣服のあらましについては上記の小冊子、また概説書として、佐々木利和『アイヌの工芸 日本の美術第354号』（至文堂 1995）などがあります。

貝澤太一（研究課・研究職員）

【著作紹介】

近年アイヌ文化に関する図書がいろいろと出版されるようになりました。その中でアイヌ文化の調査・研究に大きな足跡をのこした人たちの著作についてあらましを紹介するコーナーです。

第1回 やま だ ひで そう 山 田 秀 三

アイヌ語地名研究の第一人者であり、地名に関する著作は100をはるかに越えています。そのほとんどは著作集をはじめとする下記の単行本で読むことができます。

『アイヌ語地名の研究 山田秀三著作集』 (全4巻)

1982年末までに執筆されたアイヌ語地名研究のほとんどの著作を内容別に4巻にわけて編集した著作集です。

初版 1982～1983年、新装版 1995年 草風館 各5,825円(本体)

第一巻

第一部 アイヌ語地名のために

北海道のアイヌ地名十二話／アイヌ語種族考／アイヌ語族の居住範囲／アイヌ語の地名を大切にしたい／アイヌ地名・アイヌ語の古さ／狩猟のアイヌ地名を尋ねて／黒曜石のアイヌ地名を尋ねて

第二部 アイヌ語地名分布の研究

津軽海峡のアイヌ語時代／北海道のナイとベッ／東北地方のナイとベッの比／アイヌ語地名の三つの東西／メナという地名とその分布

第二巻

第一部 北海道の川を尋ねて

北海道の川の名(一 石狩・空知・上川南部／二 留萌・宗谷の一部・上川の一部／三 宗谷／四 網走／五 釧路・根室／六 十勝／七 日高・胆振・上川の一部／八 渡島・檜山／

九 後志／十 湖沼)

第二部 北海道の峠を尋ねて

ルベシベ物語

一 アイヌ語の内陸交通路地名／二 雨竜川筋のルベシベ／三 鶴川の累標／四 倶知安・余市間の二つの稲穂峠

第三巻

第一部 東北地方のアイヌ語地名

東北と北海道のアイヌ語地名考／十三湯のアイヌ語系地名／下北の旅の記録／津軽半島の記録／津軽の狩村の記録／コンナイという地名／東北のアイヌ地名の旅

第二部 北海道南部のアイヌ語地名

北海道の旅と地名 函館―室蘭―札幌

登別、室蘭のアイヌ語地名を尋ねて

第四巻

第一部 北海道中部のアイヌ語地名

札幌のアイヌ地名を尋ねて

札幌地区／都心と西郊／札幌地区略説／札幌物語／札幌の東南郊

深川のアイヌ地名を尋ねて

深川という地名／石狩川筋の地名／雨竜川中流の地名

第二部 追想のひと

知里さんのこと／久保寺博士の追想／金田一京助先生を偲んで／知里さんと地名調査をした話／八重九郎翁を偲んで

アイヌ語地名総索引

『北海道の地名―アイヌ語地名の研究 別巻』

北海道各地の地名について研究成果をまとめた本です。各地域ごとに市町村や主な河川や地域名について説明してあります。

初版 1984年 北海道新聞社

復刻 2000年 草風館 6,000円(本体)

『アイヌ語地名を歩く』

1984年から1985年末まで北海道新聞の夕刊に連載されたものをまとめた随筆集です。

1986年 北海道新聞社 1,650円（本体）

『東北・アイヌ語地名の研究』

亡くなる10年程前からの研究メモや雑誌などへ書いた短い原稿などを集めたもので、この本が遺稿集となりました。

1993年 草風館 6,000円（本体）

第一編 アイヌ語地名遊記

第二編 東北地方北半のアイヌ語地名

第三編 東北地方南部、関東地方北辺、新潟県を訪ねて

『アイヌ語地名の輪郭』

上記の図書に収録されなかったアイヌ語地名に関する研究論文を収録した一冊です。

1995年 草風館 6,000円（本体）

第一部 アイヌ語地名の話

第二部 アイヌ語地名の研究のために

第三部 オホーツク海沿岸の小さな町の記録ー常呂町のアイヌ語地名調査

第四部 南のアイヌ語地名を尋ねて

第五部 アイヌ語地名の周辺

山田秀三「アイヌ語地名」関係著作年譜

『アイヌ語地名資料集成』

山田氏が監修をつとめた資料集です。氏が地名研究に使ってきた古い文献や基本的な資料が収められており、江戸時代の文献から戦後に知里真志保らが編集に携わった『北海道 駅名の起源』までアイヌ語地名研究に関する貴重な文献が集められています。

1988年 佐々木利和編 草風館 24,000円（本体）

序 山田秀三

東蝦夷地名考 秦 檉麻呂

蝦夷地名考并里程記 上原熊次郎

蝦夷地道名國名郡名之儀申上候書付 松浦武四郎

蝦夷地名奈留邊志 多氣志樓主人

アイヌ語地名の命名法 B. H. チェンバレン（執行一介訳）

アイヌ地名考 J. パチェラー（中川裕訳）

北奥地名考 金田一京助

北海道駅名の起源 高倉新一郎、知里真志保、更科源蔵、河野広道

大日本沿海輿地図蝦夷地名表 伊能忠敬

アイヌ語地名資料集成について 佐々木利和

解題 佐々木利和・中川裕

アイヌ語地名索引

別冊 東西蝦夷山川地理取調図 松浦竹四郎

【センター刊行物のお知らせ】

●『久保寺逸彦文庫 文書資料・写真資料目録』

●『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』第7号

以下にテーマと執筆者を紹介します。

- ◇ [論文] 北海道大学農学部博物館のアイヌ民族資料 (下) 沖野慎二
- ◇ [調査報告] アイヌ語十勝方言の親族名称について 澤井春美
- ◇ [論文] アイヌ語千歳方言の「第三類の動詞」の構造と機能 佐藤知己
- ◇ [研究ノート] オオウバユリの加工における多様性の再検討ー「発酵」の位置づけを中心にー 本田優子
- ◇ [調査報告] 松島トミさんの口承文芸 3 大谷洋一
- ◇ [調査報告] 私の歩み：黒川セツ 小川正人
- ◇ [資料紹介] 金城朝永日記 (抄) 古原敏弘

『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』第7号および『久保寺逸彦文庫 文書資料・写真資料目録』は主に道内外の大学、博物館、研究機関、図書館、アイヌ文化関係機関などに配布するほか、北海道行政情報センター（北海道庁別館3階 電話011-231-4111（内線22-389）または 011-241-7979）にて有償頒布する予定です。

【平成12年度後半の主な動き】

(10月)

- ・平成12年度アイヌ文化講座（稚内市教育委員会と共催、稚内市）講演：佐々木利和（東京国立博物館資料部資料第二研究室長）
「ソウヤウンクルと出会った人々ー文化のクロスロード、稚内ー」

- ・アイヌ文化紹介小冊子『ボン カンピソシ 6 ウエネウサラ（口頭文芸）』発行

- ・第15回北方民族文化シンポジウム「北方諸民族のなかのアイヌ文化ー儀礼・信仰・芸能をめぐるー」（北海道立北方民族博物館・財団法人北方文化振興協会主催、網走市／発表：谷本、甲地）

- ・共同研究「近代日本の教育界におけるアイヌ教育認識の態様に関する基礎的調査研究」（東京都／資料調査：小川）

(11月)

- ・共同研究「環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究国内科学研究会」（和歌山市／参加：澤井）

(3月)

- ・運営協議会
- ・『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』第7号発行
- ・『久保寺逸彦文庫 文書資料・写真資料目録』発行
- ・『アイヌ民族文化研究センターだより』第14号発行

編集・発行 北海道立アイヌ民族文化研究センター

〒060-0001 札幌市中央区北1条西7丁目 プレスト1・7 5F

Tel. 011-272-8801(代) Fax. 011-272-8850

開館/月～金9:00～17:00 休館/土・日・祝